

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

「人類社会の進化史的基盤研究(3)」 第4回（通算第13回）研究会

日時:2014年12月13日(土) 午後1時～7時

場所:AA研棟3階マルチメディアセミナー室(306号室)

報告者:

1. 西井涼子 (AA研)
2. 杉山祐子 (AA研共同研究員・弘前大学)
3. 水野友有 (ゲストスピーカー・中部学院大学)

内容 (要旨)

1. 「『顔』と他者—ムスリム女性のヴェール着用をめぐる—」 (西井涼子)

身体存在としての人間のあり方において、「顔」は身体の一部でありながら、強いイメージ換気力をもつ。「顔」をめぐる考察は、自己と他者をめぐる考察へとつながる。本発表では、ムスリム女性の「顔」を覆う行為をめぐる、他者にかかわる存在論へと展開することを試みた。

「顔」の成立

「顔」の原型の成立は、生物学的には、管の穴であり、免疫系の成立と同時であると言われている。「即物的に見れば、人間は多数の管（チューブ）から成っている。・・・中でも最も基本的な管は消化管である。というより、人間そのものが消化管という管を内腔とした、巨大な管と見ることもできる。」（多田：166）このように、人間を管の穴とみると、「顔」は、生物としての身体をもつ人間と、自己と他者という社会関係に開かれものとして考えるときの交点となる重要な位置をしめる。

免疫系は「自己」と「非自己」を鋭敏に見分けて、「非自己」を排除する反応を起こすものと定義されてきた。しかし、免疫学的には、自己と他者の境界は可変的・流動的なものであるといえる。多田は、「昨日まで『自己』であったものが、今日は『非自己』となり得る。それぞれの時点では『自己』の同一性というものが存在することを認めたとしても、本当に連続性を持った『自己』というものが存在するのであろうか」と問う。「自己」とは、その免疫系の行動様式によって規定され、「自己」の行為そのものであって、「自己」という固定したものではないことになるといふ（多田：219-220）。

ここでは、生物としての人間の身体の側からは、自己を表わす「顔」はその根幹から崩され、流動的な自己がそのもとにうごめいているといえよう。

「顔」の不在

一方、自己と他者の社会関係において、「顔」の不在は何を示しているのであろうか。

鷲田は「顔の不在がひとを不安にするのは、おそらく、その顔がもはや何かとし

て限定できない曖昧な存在へと移行したからである」という（鷲田：34）。

「顔の不在とは、人びとがたがいに自己を相手のなかに鏡像のように映しあう、そのような相互理解の関係に入ることの不可能性のことであり、したがって覆面や仮面で顔を覆うことは、私と他者とが滑らかな交通関係に入ることの一方的な拒絶を意味している（鷲田：36）。」

ムスリム女性の顔を覆うヴェール

本発表では、タイのミャンマーとの国境の町メーソットにおけるヴェールで顔を覆うムスリム女性の事例から、顔を覆うことについて考えた。はたして、ヴェールで顔を覆う女性は、他者との交通関係を拒絶しているといえるのだろうか。

顔を覆うことを決意した女性たちは、タイ語でダツワと呼ばれる 1930 年代にインドから始まったイスラーム復興運動に関わっている。彼女たちは、女性と親族男性の間でのみヴェールをとる。つまり、彼女たちの顔の表情は、特定の人のみにもせる。

多くの女性は、ヴェールで顔を覆った動機を、10 人前後で各地をまわってイスラームの勉強をするダツワに出ている間の仲間の女性からの影響をあげる。サイダー（38 歳）はそのことを次のように語った。

「ダツワにでていて、私以外はみんな顔を覆っていた。40 日のダツワから帰ってきてから、私も顔を覆いたくなって覆った。・・顔を覆うことであの世で報酬を得られるし、この世では安全を得られる。」

ファティマ（28 歳）は顔を覆い始めたときには、自分にできるだろうかと思った。しかしやってみるとよかった。当時の夫はそれを嫌がり、やめさせようとした。その後、彼女や子供に暴力をふるっていた夫と別れるが、現在は、元夫が働いている南タイからメーソットに帰ってきた時に道であっても、挨拶をすることなく彼を避けることができる。「顔を覆っているから、彼を無視することができる」という。

顔を覆うことで、多くの女性はその生活の変化を感じている。彼女たちは、「心がより平穏になり(citcai sagop khun)、幸福になり(mi khwam suk)、ここちよくなる(sabai cai)」という。また、ある女性は、夫がより愛するようになったという。

顔を覆い始めて9年のラフマット（42 歳）は、20 歳で結婚し、16 歳の娘がいる。ラフマットは次のように語る。「アッラーは彼に愛情を入れてくれた、なぜなら私が顔を覆っているから他の女性とは異なっている。他の男性は私の顔を見ることはできない。彼の視線では私は永遠に美しくみえる。彼はいつも『きみは美しい』という。」

二つの「顔」

ムスリム女性の顔を覆うヴェールを被った姿からは、年齢も容貌もわからないし、対面状況でどのような表情をしているのかも見ることはできない。ここでは、二つの「顔」をみておく必要がある。

「顔」Ⅰ レヴィナスのいう、他者と接するとき、語り合うときに眼前にあるものの根本的「不可視性」を読者に認識させる「顔」。レヴィナスの独自性は、「顔」を

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

視覚のパラダイムから言語（呼びかけと聴取）のパラダイムに移行させたこと、そして「顔」を無限者と見做しながらもそこに「人間」を見て取ったことにあるという（郷原：286）。

ヴェールで顔を覆った女性を、男性はみつめてはいけなく感じる。また、顔を覆う女性は、男性の前で顔を出すことで恥ずかしいと感じることは、レヴィナスの「顔」に通じるだろう。「顔」が面である身体凝縮であるとする、それは、「顔」を見てはいけなくというメッセージを発するとともに、一方で、ヴェールで覆われた全身が、「ムスリム女性」であるという強烈なメッセージとなった「顔」を生成しているともいえる。

「顔」Ⅱ ドゥルーズ＝ガタリの「倫理」（エティカ）にとって顔とは、むしろ記号やイメージや主体の形成に深くかかわる装置であり、触発し触発される情動の力を覆い囲むような主体化や領域化の様式である（宇野:152）。

ヴェールの下顔を特定の人にもみせることは、特異性の保持により、共同性を能動的に作り出そうとする仕掛けとなりうるだろうか。ダッワの勉強会に集まった顔を覆う女性たちは、他の人々にとっては、他者として集合的なムスリム女性の「顔」を形成しているともいえるかもしれない。

「顔」は、生物学的身体と社会関係の交点において、融通無碍な自己と他者の関係、意識と意識を越えた現象として現れる現実の様相を凝縮している場であるといえよう。

【文献】

- 内田樹 2004 『他者と死者 ラカンによるレヴィナス』海鳥社。
2011 『レヴィナスと愛の現象学』文春文庫
宇野邦一 2012 『ドゥルーズ 群れと結晶』河出書房新社。
大橋完太郎 2013 「かくも味わい深き他者の顔」『ユリイカ』8月号臨時増刊:83-90。
熊野純彦 1999 『レヴィナス入門』ちくま新書。
2003 『差異と隔たり 他なるものへの倫理』岩波書店。
2012 『レヴィナス 移ろいゆくものへの視線』岩波書店。
郡司ペギオ-幸夫 2013 『群れは意識をもつ 個の自由と集団の秩序』PHPサイエンス・ワールド新書。
合田正人 2011 『レヴィナスを読む〈異常な日常〉の思想』ちくま学芸文庫。
郷原佳以 2012 「『顔』と芸術作品の非-起源」『現代思想』vol.40-3:285-299。
多田富雄 1993 『免疫の意味論』青土社。
港千尋 2010 『考える皮膚 触覚文化論』青土社。
港道隆 2012 「現象学から顔一痕跡へ、そして代捕」『現代思想』vol.40-3:85-127。
レヴィナス、エマニュエル 1999 『レヴィナス・コレクション』ちくま学芸文庫。
鷲田清一 1998 『顔の現象学 みられることの権利』講談社学芸文庫。

2. 「祖霊・呪い・日常生活における他者の諸相—ザンビア農耕民ベンバの事例から」 (杉山祐子)

1. 「集団」から「他者」へ

本発表では、『集団』（河合香吏編, 2009）に所収の拙論（杉山 2009）で展開した議論をふまえ、人類の進化的基盤を視野にいれながら「他者」を考える筋立てを示した。事例として扱うのは、ザンビアの焼畑農耕民ベンバである。母系制をとるベンバは伝統的王国を形成しているが、居住集団はきわめて小さく、人や集落の移動性が高い。

『集団』に所収の拙論では、高い移動性を担保しながら、小さな居住集団を一大王国へと編み上げていくしくみについて論じたのだが、そこで強調したのは、「いま・ここ」における相互交渉の連鎖によってゆるやかにうみだされる「非構造」の集まりの重要性である。非構造の集まりでは、自-他の区別よりも、時空をともしる行為—シェアリングがむしろ顕在化し、人々の行為やその同調が作り出す「その場性」が重要である。このことを考えると、人間の集まりにおいて「他者」がいつも存在しているとはかぎらないといえることができる。また、非構造の集まりを可能にする間主観的・間身体的認知や共感力は、ヒトのみならず、高等霊長類が共通してもつ能力であると前提できる。その上で、本発表では、言語をもつヒトに独特な「他者」のありようを検討した。

2. 多層性をもつ構造化の局面と他者のあらわれ

「非構造」の集まりとは異なり、ベンバの日常生活において、自-他のちがいが強く意識され、構造化の局面が現われるのは、集団の維持や世代交代など、より長いスパンでの集団を考えるときである。そこでは、非構造の集まりにおけるア priori な共在から互いを切り離す行為が生じ、境界のはっきりしたグループ化がおこなわれる。それはたとえば婚姻関係や同盟関係などがあげられるが、ベンバの場合、世代交代期の男性の同盟と女性からの信頼が集団の形成と維持を左右するので、世代ごとや社会的地位ごとの境界作りとグループ化がはかられる。このような過程では、「他者」がことさらに意識される局面とそうでない局面が、異なる社会的場面に応じてあらわれるという、社会的局面の多層性を指摘することができる。

そこで、このような多層性を視野に入れて、ハーマンスとケンペン（2006）の「対話的自己」、かれらが下敷きにしている G.H.ミード（1934）の「一般的他者」などの議論から、多数の自己と多数の他者という考えかたを用いる。

3. ベンバにおける「他者」の諸相

ベンバの生活にあらわれる「他者」の諸相は次の4つに分けられる。すなわち、A) 顕在化しない他者、B) 過去のワタシ、他者によって決められる「身におぼえないワタシ」という他者、交渉可能な他者、C) 絶対的他者、D) 身のうちにある超越的他者、である。

A) は、非構造の集まりにおける他の人びとがそれにあたる。同調行為、相互行為およびその繰り返しが、集まりの場を生成する。B) は、自分自身でありながら、

そのありようを他の人びとによって決められてしまうという意味で、自分にとっても「他者」である自己のありようである。ただし、このような「他者」は相互理解できずとも交渉可能であると位置づけられるのが特徴である。ネットハンティングの不猟や村内のもめごとがあらわれた際に、そうした問題の解決にむけた「交渉相手」や浄化儀礼の重要な参加者として、このタイプの「他者」が顕在化させられる。

C) は、「自分の近親者を呪い殺して自分の力を強め、それを喜ぶ」といわれる邪術者であり、交渉も共存もありえないが存在してしまう絶対的他者である。D) は、ベンバの祖霊信仰や生殖観と関わり、それぞれのベンバの身のうちにある超越的他者である。女性が妊娠すると、そのへそから祖霊（始祖のベンバ王たち）が胎児の身体に入るとされ、ベンバである「ワタシ」の身体の芯には祖霊がいるといわれる。どの祖霊が入ったかは母親かオバが夢見で知る。同じ祖霊が他の村びとのなかにもいる。

4. 集団の離合集散と「他者」をつくる物語の共有

上記のような他者の諸相は、祖霊信仰と呪いに関わり、相互に密接なつながりをもつ制度である。そのあらわれには、「物語（ブルナー、1998）」が付随するが、いずれも特定のことばと呪医などの専門家の介在があってあらわれる。その物語によって、他の村びと（個体）は物語のなかに、ある位置をもった「他者」として位置づけられ、「われわれ」との境界線をきわだたせる。どのような文脈による物語が創り出されるかで、「われわれ」の内容も変化する。このような道具だてを利用して、日常に起こるさまざまなできごとを関連づけ、複数の人びとが共有する物語がつくられることがある。とくに世代交代期につくられる物語は、それまで共に暮らしていた他の村びとを「絶対的な他者」として自分たちから切り離すはたらきをする。

ベンバの村が分裂するとき、それぞれの物語を共有する人びとがまとまって移住する傾向が強い。ただし、この物語は不変ではなく、村が再生するときなど、状況が変化すると、新たな「他者」の物語として語り直され、一度離散した人びとがふたたび共に暮らすための道筋を示すこともある。

5. ベンバにおける他者の諸相から考えられること

これまで述べてきたことから、以下の諸点を指摘することができる。

1) 他者は局面によってさまざまにあらわれる。私たちは日常生活において他の人との相互行為を実践するという経験をとおして、このことを知っている。社会的局面の多層性と同様に、「他者」のあらわれも多層的であり、個人はさまざまな「他者」として可變的にあらわれる。

2) 非構造の集まりのように自-他の違いを問わない局面がある一方、構造化する局面では、本来つながっている他の人を「絶対的な他者」にしたてあげるやりくちがあり、そこに物語が大きくかかわる。

3) ベンバにおける他者の諸相から、集団の離合集散にかかわる制度的しくみの土台がみえる。それはたとえば、「身のうちにある超越的他者としての祖霊」という考えかたがあり、同じ祖霊が他のベンバの身体のなかにも存在することから、ベン

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

バどうしは相互に分ち難くつながっているという前提がある。相手が理解不能な「他者」であったとしても、その関係は切断されてはいない。このように、あらかじめ完全な社会関係の切断が不可能な道具立てをしておきながら、村の世代交代の時期などには、共に暮らしてきた人びとを「絶対的な他者」として切り離すところに、集団の分裂と再生にかかわるしかけがあると考えられる。

【文献】

- ミード、G.H. 1995 『精神・自我・社会』人間の科学社（原著 1934）
ハーマンス&ケンペン 2006 『対話的自己』新曜社（原著 1993）
ブルナー、J. 1998 『可能世界の心理』みすず書房（原著 1986）
杉山祐子 2009 「われらベンバの小さな村」河合香史（編）『集団』京都大学学術出版会

3. 「比較発達心理学的観点からみた発達初期における『他者』の存在」（水野友有）

本発表では、発表者がこれまで取り組んできた研究、特にチンパンジーの発達研究と、発達心理学におけるこれまでの「他者」にかかわる研究を紹介しながら、比較発達心理学的視点からみた発達初期における「他者」に関する発表者の考えを報告した。

1. 発達心理学における「自己」と「他者」

発達心理学において「他者」を考える場合、必ず「自己」の発達の話題が取り上げられる。特に、自己認識の発達は古くから研究されてきたトピックである。自己認識の発達を調べる最も有名な研究が鏡像認知だろう。鏡像認知とは、ある個体に鏡を提示して、個体が鏡に映った像を自己のものだと認識することであり、鏡像のマークテストによって自己認識の発達が調べられてきた。その対象は、ヒト乳幼児をはじめ、チンパンジー、イルカ、アジアゾウまで幅広い。ヒト乳幼児は、生後1歳以前は、鏡に映った自己像に対して「他者」に対する反応のようなふるまいであり、生後1歳以降は、鏡に映った自己像を自分だと認識するようになる。発表者が実際におこなったヒト乳幼児を対象にした鏡像実験では、生後7ヶ月は鏡像に対する微笑反応やリーチングがみられ、生後2歳児は、わざと変な顔をしたり、踊りだしたりする反応がみられた(映像で紹介)。

鏡像認知を含む自己意識や自己認知に関する研究の結果をもとに、「自己」をどのように対象化し、そこに何を認知しているのか、自己意識と自己認知の発達を概観した。生後0～3ヵ月では、自他の区別の意識はないが、養育者の表情にあわせた表情を表出するなどの共鳴動作がみられる。生後3～8ヵ月では、不確実ではあるものの自他の区別ができ始める段階となる。たとえば、生後6ヵ月ぐらいの喃語を話す乳児が養育者と対面でやりとりをしている場面で、養育者が発話しているときに乳児は黙って養育者を見つめ、養育者が話し終わると乳児が発声しはじめる。こうした「他者」との会話様のやりとりが可能になる時期である。一方この時期に

は、まだ鏡像に対しては社会的反応を示し、自己認知はできていない。生後8～12ヵ月には、「他者」の注意を引くような行動が増え、鏡像での運動性を確かめはじめ。1歳～1歳半になると、自分の名前に対して反応し、鏡像の自己認知も可能になる。このようにヒトの場合、生後間もない時期からの「他者」との交渉を基盤にして、乳児期後半までに「自己」を意識し、「自己」を認知するようになると考えられる。

1980年代以降発達心理学において急速に進んできた「他者」理解についても触れた。心の理論の研究である。心の理論とは、「他者」にも心があることを知っており(他者への心の帰属)、「他者」の心のはたらきを理解し(他者の心的状況の理解)、それに基づいて「他者」の行動を予測すること(他者の行動の予測)ができる力のことである。有名なサリー・アン課題をはじめとする様々な誤信念課題により、4～5歳で獲得されるといわれている。言語教示を必要としない実験により、乳児期後半(生後15ヵ月)において心の理論の萌芽がみられるという報告もある。

2. 発達初期における「他者」との関係－Bowlbyによるアタッチメント理論

個の発達において初めて出会う「他者」は一般的には親、養育者である。発達初期の「他者」を考える上で、古い理論ではあるがBowlbyのアタッチメント理論を概観した。イギリスの児童精神科医・精神分析家だったBowlbyは、第二次世界大戦における戦災孤児に関する体系的調査をきっかけに母性的養育の剥奪について報告した後、エソロジーとの邂逅により発想を転換したことからアタッチメント理論を提唱した。Bowlbyが提唱したアタッチメントやその発達プロセスを改めてまとめると、Bowlbyの理論は、心理学のみならず生物学や比較行動学などの粋を集めたグランドセオリーであったこと、アタッチメントの最大の機能は個体の生存を行動に保障することとしたことが再確認できる。

3. ヒト乳児を対象とした「他者」に対する反応に関する研究（プログレスレポート）と比較発達心理学的考察

発表者が現在とりくんでいる乳児研究を紹介した。対象は、生後1週から仰臥位で安定してられる時期(生後4・5ヵ月)で、発達初期における「養育者」と「養育者以外の他者」に対する反応の発達を明らかにする研究である。特に、対象児の笑顔の表出を指標として実験的観察をおこなっている。観察場面は、対象児が一人で過ごす単独場面、非接触で養育者が対面あやす場面、非接触で養育者以外の他者が対面であやす場面とし、それぞれの場面において対象児がどのような表情を表出するかを観察した。

現時点での結果は、「養育者以外の他者」に対して、生後2～3ヵ月をピークに親和的な反応を示し、生後4ヵ月以降になると、笑顔やリーチングなどは見られず消極的な反応、あるいは泣くといった拒否的な反応になった。またこの時期になると、泣いていた対象児が養育者に抱かれると泣き止むなど養育者を選好する行動がみられた。

こうした結果から、ヒトの発達初期において生後2～3ヵ月までは多様な「他者」への適応期であり、「自己」と「他者」の区別や「他者」との関係性に関係なく、

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

目の前の「他者」とコミュニケーションを成立させる時期であると考えられる。生後4・5ヵ月以降になると、脳の発達も踏まえて養育者への選好が強まり、人見知りや分離不安などが出現しする、つまり特定の「他者」との関係を構築する時期へと移行すると考えられる。

またこの時期は、寝返りやハイハイ、独歩へと、自ら姿勢をコントロールできるようになる時期である。自ら移動可能になった乳児期後半における養育者に対する選好的・求心的な行動は、運動発達的には乳児が養育者から物理的に離れることはできるが、心理的に養育者を選好するため、乳児と養育者との間に一定の距離保つことができるといえる。本研究において、今後は、多様な「他者」への適応期だと考えている生後2～3ヵ月にさらに焦点をあて、多様な「他者」を具体的に挙げ、「養育者」と「養育者以外の他者」以外の「他者」に対する乳児の反応に関する実験的観察を試みたいと考えている。

最後に、比較発達心理学的視点からみたヒトの発達初期における「他者」の存在とは、乳児に対して物理的に離れていることが重要であり、離れていることが乳児の主体的な行動を引き出し、さらにこうした状況や文脈がヒト乳児の認知機能の発達に関連しているのではないかと、としてまとめた。